

一 栗生武夫先生略年譜・著作目録（五訂稿）

五訂稿はしがき

平成一〇年二月一五日に四訂稿を出してから、五年余りが過ぎた。早く改訂を考えていたが、なかなか取りかかれず、今般、漸くその後の調べを基に補正した五訂稿を作成した。これとて未だ不十分なものであり、今後も更に補訂に努めたいと考えているので、よろしく御示教の程お願い申し上げる次第である。

四訂稿までは、上山安敏先生、岩野英夫先生はじめ多くの先生方に御指導をいただいていたが、今回は、両先生にはもとより続けてお教えいただくとともに、加えて、小山貞夫先生、平田公夫先生、そして『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、平成一四年五月三〇日刊）の著者である関口安義先生から、貴重な御教示を賜った。ここに誌して深甚の謝意を表する。

また、四訂稿以降の間で特筆すべきこととして、「栗生武夫電子文庫」を有する和田徹氏のホームページ「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」（旧館は、平成二三年一月二一日開設、同二五年五月一〇日閉鎖、新館に移転。）が公開されたことがあげられる。ただただ敬服するばかりである。ぜひとも御参照願いたい（<http://home.q02.itscm.net/tosyokan/>）。

平成二五年九月一日

相州荏田にて

編者 謹誌

「凡例」

一 栗生武夫先生（一八九〇～一九四二）の略年譜とともに、著作を、一 著書、二 編書、三 論説その他に分けて収載した。

二 論説その他中最下段の数字は、著書中の当該数字の著作に所収を示す。ただし、収録に当たり表題変更、改訂が加えられているものが多々あるが、ここでは、一部を除き一々断っていない。

三 著書 編書 論説その他とも、書評、紹介等のあるものは、当該著作の左に「書評」として誌した。一部「関連」著作をも誌した。

四 論説その他中、随筆、評論、時論の類は〈随筆等〉、書評、紹介の類は〈書評〉、辞典項目は〈辞典項目〉、談話は〈談話〉と誌した。ただし、著書にまとめられたもので、現時点で初出不明のものが相当存在する。特に随想集『一法学者の嘆息』所収の論稿についての初出は、未だ調査が及ばないため、判明したもの（同書の目次番号をとって、例えば⑦―⑤）のように誌した。しか掲載していない。

五 参考として、四（一） 追悼・回想及び（二） 関連を載せるとともに、四（三）として栗生先生御尊父の栗生武右衛門氏（一八五三―一九三六）関連文献を採録した。同氏研究もまた別の課題であるといわれている。

六 四訂稿までには、「栗生武夫先生メモ」（註：「メモ」目次は下記九参照。）及び附録として「一 主要参照ローマ法・法制史関係文献目録一覽、二 『京都法学会雑誌』（第一三卷、大正七年七～十二月）、『法学論叢』（第一卷～第五二卷第一号、大正八年七月～昭和二年七月）、『法学』（第一卷～第二四卷第一号、昭和七年～昭和二五年三月）巻号数対照表」を収録したが、本五訂稿では、一については補訂の上二〇九頁に掲載し、二はいずれも省略した。

七 三訂稿、四訂稿には、上山安敏先生の序文、四訂稿には、更に『法学』第二一卷第六号（昭和一七年六月）巻頭の「故栗生教授遺影」、

小町谷操三教授の「弔辞」を掲載したが、本五訂稿にはいずれも収録していない。

八 四訂稿までの刊行日時は、次のとおりである。初稿：平成七年八月二五日、改訂稿：同二月一日、三訂稿：平成八年二月二日、四訂稿：平成一〇年二月二五日。

九 「栗生武夫先生メモ」は次のとおりである。「はじめに、一 追悼・回想（一）栗生武夫先生との出会い、（二）岩野英夫教授の栗生先生研究（三）『東北大学法文学部略史』及び『東北大学五十年史』中の栗生先生、（四）原田慶吉教授の栗生先生論、（五）小町谷操三教授の弔辞及び栗生先生の遺影、（六）金澤理康教授の栗生先生の思い出（七）戒能通孝博士の栗生先生の思い出（八）高柳真三博士の栗生先生の思い出（九）恒藤恭博士の栗生先生の思い出（一〇）末川博博士の栗生先生の思い出（一一）西本穎博士の栗生先生の思い出（一二）『法学（読書案内）』中の栗生先生、（一三）齋藤秀夫博士の栗生先生の思い出、二 重要論述（一）『法史学要講（第一分冊）』の件、（二）恒藤恭博士の栗生先生『法の変動』批評、（三）『法律史の諸問題』巻頭の法史学対象論、三 栗生先生出題の「法史学」等試験問題、四 栗生先生その人（一）栗生武右衛門氏の件、（二）京都における栗生先生、（三）羅馬法子奨学費等と栗生先生、（四）京都府立一中校長山本安之助氏の件、（五）社会経済史学会と栗生先生、（六）橋本文雄博士と栗生先生、（七）栗生先生門下の方々、（八）仙台での栗生先生の御住居（九）河北新報社にみる栗生先生、（一〇）栗生先生の御筆跡、（一一）栗生先生その後、五 随筆拾遺（一）栗生先生随筆拾遺（一）（『帝国大学新聞』等所載の随筆等）、（二）栗生先生随筆拾遺（二）（『法学』サロン）掲載随筆）、六 栗生武夫先生ノート—人と業績—（一）序、（二）生涯、（三）学風及び業績、（四）結語」

一〇 現時点でも遺漏なきを期し難く、本目録から漏れたものもかなりあり、当該年の発表順についてもなお調査が不完全である。識者の御示教を得て、更に補正に努めたいと考えている。

一一 栗生先生の著作の全国諸大学における所蔵状況についてはNACSIS Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>)を参照。

一二 近年、「栗生武夫電子文庫」を有する和田徹氏のホームページ「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」（旧館は、平成二年二月二日開設、同一五年五月二〇日閉鎖、新館に移転。）が公開されている。[\(http://home.q02.itcom.net/tosyokan/\)](http://home.q02.itcom.net/tosyokan/)を参照。

「目次」

五訂稿はしがき——三（頁）

「凡例」——四

I 略年譜——七

II 著作目録——九

一 著書——九

二 編書——一三

三 論説その他——一四

四 参考——二五

（一） 追悼・回想——二五

（二） 関連——二七

（三） 栗生武右衛門氏（二八五—二九三六）関連——二五

人名索引——（人名索引二）

I 略年譜

明治三三（一八九〇）年 二月二日

東京神田に生まれる。

明治三六（一九〇三）年 四月

私立東京中学校二年に入学

明治四〇（一九〇七）年 三月 三日

同卒業（註：東京中学校は現在の上野塾・東京高等学校の前身に当たる。同校については、『校

史 東京中学校・東京高等学校』〈創立百十周年記念出版、昭和五八年五月刊〉、『校史 一

八七二―一九九二 東京高等学校』〈平成四年一〇月刊〉等各参照。）

大正 二（一九一三）年 七月

第七高等学校造士館第一部独法科（第二〇回、一八六名）卒業

同 年 九月

京都帝国大学法科大学政治学科入学（大正三年八月政治経済学科に改組。）

大正 四（一九一五）年 九月

法律学科に転科

大正 六（一九一七）年 七月

京都帝国大学法科大学法律学科卒業

同 年 九月

同大学院に入学、千賀鶴太郎に師事（羅馬法専攻か〈？〉）

大正 七（一九一八）年 六月

専攻科目を比較法制史に変更、仁保亀松に師事

大正二〇（一九二二）年 四月

右退学、同志社大学法学部教授（民法総則、独書講義）に任用される。

同 年 同月

立命館大学講師を嘱託される（大正二一年四月まで）。

大正二一（一九二二）年 四月

真宗大谷大学嘱託教授（予科）を兼任

同年 七月

法史学研究のため、英、独、仏に派遣されること決定

同年 一月

他の東北帝国大学教官採用予定者とともに、学部規定決定の会議に参加

大正二二（一九三三）年 一月

留学のため出発（英、独、仏、後に瑞、米を追加。）

大正二四（一九三五）年 七月 六日

留学を終え帰国

同月二三日

東北帝国大学教授に任用される。法文学部勤務、法史学講座担任、西洋法律史担当

昭和 三（一九二八）年 四月

京都帝国大学法学部講師を嘱託される。西洋法制史を担当

昭和 四（一九二九）年 七月二九日

京都帝国大学より法学博士の学位を受く（『ビザンチン期ニ於ケル親族法ノ発達』）。

昭和 八（一九三三）年 七月

右講師の職を解かれる（『京大事件』のため）。

昭和 一七（一九四二）年 五月 二日

逝去（於東北帝大附属医院）

同月 五日三時—四時

仙台市川内渡橋通二二—二六の自宅で告別式挙行（『東京朝日新聞』昭和一七年五月

四日、『東京朝日新聞縮刷版』同年五月二三頁）

位階勳等 正四位勲二等

宗教 真宗

趣味 日本音楽

（後掲「II四参考（一）追悼・回想、（二）関連」著作、就中岩野教授の御論稿等により、取りあえずの略歴を誌した。）

II 著作目録

一 著 書

昭和 三（一九二八）年

- ① 『婚姻立法における二主義の抗争』 京都 弘文堂書房（二月二〇日刊、菊版クロス四二〇頁、三円二〇銭）

〔書評〕 中川善之助 「昭和三年学界回顧・法学界」 『経済往来』 三卷二二号（昭和三年二月）、日本評論社

- ② A 『ヒザンチン期における親族法の発達』 京都 弘文堂書房（五月二〇日刊、菊版クロス二二〇頁、一円八〇銭）（註：学位論文）

文（京都帝国大学）

〔書評〕 中川善之助 「昭和三年学界回顧・法学界」 『経済往来』 三卷二二号（昭和三年二月）、日本評論社

昭和 四（一九二九）年

- ③ 『人格権法の発達』 京都 弘文堂書房（註：「恒藤恭君にささぐ」とある。）（二月二〇日刊、菊版仮綴二二〇頁、一円）

〔書評〕 中川善之助 「昭和四年学界回顧・法学界」 『経済往来』 四卷二二号（昭和四年二月）、日本評論社

- ④ 『西洋立法史』 第一分冊 京都 弘文堂書房（四月二五日刊、菊版仮綴二四〇頁、一円二〇銭）

〔書評〕 中川善之助 「昭和四年学界回顧・法学界」 『経済往来』 四卷二二号（昭和四年二月）、日本評論社

飯田忠純 「『法律史』と『法制史』との限界―法の歴史の法律学的構成について」 『社会経済史学』 二卷四号、昭和七

年七月)

昭和 五(一九三〇)年

⑤ A 『婚姻法の近代化』

京都 弘文堂書房(註:『京都府立第二中学校長山本安之助先生に捧ぐ』とある。)(八月二五日刊、菊版
仮綴二〇〇頁、一円八〇銭)(註:山本安之助氏については、『京一中洛北高校百年史』〈昭和四七年七月刊〉、服部四郎「郷土亀山
市と県立津中学校」〈『津高同窓会報』二三号、昭和五九年二月二日。後に、服部四郎『一言語学者の随想』〈汲古書院、平成
四年二月刊〉四四九頁以下に収録。)、『京都府立洛北高等学校―日本の名門高校ベスト一〇〇―』〈『週刊朝日』平成一三年九月
二二日、五二頁〉等参照。)

〔書評〕中川善之助「栗生武夫『婚姻法の近代化』」(『法律時報』二卷二号、昭和五年)

〔関連〕栗生武夫「中川教授の批評に対して」(『法律時報』三卷二号、昭和六年。後 ⑦『一法学者の嘆息』に一部収録。)

〔関連〕中沢本に、胡長清『婚姻法之近代化』(中華民國、詳細不明)があるという。これは、曾華松(中華民國大法官)「惟
理是求的炎輝院長」『法学哲人―戴炎輝博士回憶集』(台北、一九九七年二月二八日)一一四、一一五頁による。

同訳本について、平成一一(一九九九)年三月末、台湾の知人にお尋ねしたところ、わざわざ曾大法官にお聞き下
さったが、同氏がかつて軍法学校で予備軍官(軍法官)訓練時に、同校図書室で借りて読まれたものであることし
かわからず、加えて二、三の主要図書館にも当たっていたのだが、発見できないとのことであった。

昭和 七(一九三二)年

⑥ A 『中世私法史』

京都 弘文堂書房(二月一日刊、菊版仮綴一五〇頁、一円二〇銭)

〔書評〕西本穎「栗生教授『中世私法史』」（『法学論叢』二七巻四号、昭和七年）

昭和二（一九三六）年

⑦ 『一法学者の嘆息』 東京 弘文堂書房（二〇月一五日刊、四六版二九四頁、一円五〇銭）

〔書評〕山本戸克己「中川教授『法学協奏曲』」（註：河出書房、昭和二年一〇月刊）と栗生教授『一法学者の嘆息』（『法律時報』九巻一号、昭和二年）（註：山本戸教授は、平成二五（二〇〇三）年四月一六日、逝去された。享年九二。かつてお聞きしたところによると、本書評は末川博博士の御依頼によるものであったようである。）

昭和二（一九三七）年

⑧ A 『法の変動』 東京 岩波書店（二月一四日刊、菊版四六四頁、三円二〇銭）（註：「佐々木惣一博士に捧ぐ」とある。）

〔書評〕恒藤恭「栗生武夫『法の変動』——異彩を放つ栗生氏の新書」（『帝国大学新聞』六六六号〈昭和二年三月三日〉、『帝

国大学新聞複製版〉〈東京 不二出版、昭和五九（一六〇）年〉一一巻二三八頁）

〔書評〕西本穎「栗生教授『法の変動』」（『法学論叢』二六巻二号、昭和二年）

〔書評〕淵（測）定「栗生武夫『法の変動』」（『法と経済』七巻四号、昭和二年）

〔書評〕〈カレントブックス〉船田亨二「栗生武夫『法の変動』と寺田寅彦全集の随筆」（『帝国大学新聞』六九〇号〈昭和二二

年二〇月一八日号〉、前掲『帝国大学新聞複製版』一一巻四一〇頁）

昭和二（一九三七）年

⑨ 『法史学要講』第二分冊 「出版地不明」「出版者不明」（菊版仮綴一〇六頁）（註：発行年月日不明であるが、西本、久保両教授

の⑧、⑩に対する書評よりみて、おそらくこの間と思われる。同書については、例えば、立命館大学「末川文庫」、國學院大学「峯村光郎文庫」、九大法、東北大本館、同志社大、日大法等各所蔵。また、前掲和田徹氏の「栗生武夫電子文庫」にも収録されている。）

昭和一五（一九四〇）年

- ⑩ 『法律史の諸問題』 東京 岩波書店（二月二七日刊、菊版四六九頁、四四三〇銭）（註：「田村徳治博士にさゝぐわが親愛のしるしとして」とある。）

〔書評〕（新刊紹介）「栗生武夫氏『法律史の諸問題』」（『法律時報』一二卷四号、昭和一五年）

〔書評〕西本穎「栗生博士『法律史の諸問題』」（『法学論叢』四三卷四号、昭和一五年）

〔書評〕久保正幡「栗生武夫著『法律史の諸問題』」（『国家学芸雑誌』五四卷五号、昭和一五年）

〔書評〕三戸寿「栗生武夫博士『法律史の諸問題』」（『法律時報』一二卷六号、昭和一五年）

〔書評〕細川亀市「栗生武夫博士著『法律史の諸問題』を読む」（『法学叢林』四三卷七号、昭和一五年）

〔関連〕牧野英一「国民精神と正当法」（『自治研究』一六卷四号、昭和一五年）（註：⑩中「序にかへて法史学の対象を論ず」を批評したもの。）

〔関連〕「栗生武夫『法律史の諸問題』（昭和一五年）（中川善之助、清水英夫編『読書案内 法学』第三編法学名著パトロール）〈社会思想社、昭和四三年三月二〇日〉

昭和一八（一九四三）年

- ⑪ 『入会の歴史其他』（法学叢書7） 東京 日本評論社（九月二〇日刊、四六版二〇二頁、一円五〇銭）（註：遺著、高柳真三教

授の序言が附されている。)

〔書評〕 水本浩・平井一雄『日本民法学史・通史』(信山社 平成九年二月二〇日、二二九頁)

昭和二四(一九四九)年

- ⑧ B 『法の変動』 東京 岩波書店、第二刷(八月五日刊)(註:⑧ A中ナチス関係につき省略があるとともに、高柳真二教授の跋が附されている。)

昭和四三(一九六八)年

- ② B 『ビザンチン期における親族法の発達』 東京 清水弘文堂書房(九月二〇日刊、A五版、一、五〇〇円)(註:②の復刊)
- ⑥ B 『中世私法史』 東京 清水弘文堂書房(九月二〇日刊、A五版、一、〇〇〇円)(註:⑥の復刊)
- ⑤ B 『婚姻法の近代化』 東京 清水弘文堂書房(二〇月刊、A五版、一、五〇〇円)(註:⑤の復刊)

二編 書

昭和一〇(一九三五)年

橋本文雄『社会法の研究』 東京 岩波書店(四月一日刊、菊版三七六頁、二円五〇銭)(註:恒藤恭と共編)

〔書評〕 戒能通孝「橋本文雄『社会法の研究』」(『国家学』雑誌 四九卷九号、昭和一〇年)

三 論説その他

大正 七（一九一八）年

Jus Gentium 發達ノ内面

『京都法學大雑誌』 一三卷七号

大正 八（一九一九）年

現代法理学ノ三問題（一）（未完）

『法学論叢』 一卷一号

大正 九（一九二〇）年

（なしか？）

大正一〇（一九二一）年

羅馬法分布史に於ける東羅馬帝國の地位（一）（二）（三完）

『法学論叢』 六卷二、一号、七卷二号（^⑩）

西洋法制史研究の必要に就て

『法学論叢』 六卷五号

大正一一（一九二二）年

蛮人法殊にLex Salicaに就て

『法学論叢』 七卷一号

中世イタリヤの法源（一）（未完）

『同志社論叢』 七号（二月）

ローマの法学教育

『法学論叢』 七卷五号（^⑩）

大正二二（一九三三）年

（註：大正二二年一月～大正二四年七月在外研究）

大正二三（一九二四）年

ゼツケル教授逝く 『法学論叢』 一二卷二号（⑦—五）（註：在ベルリン執筆。）

大正二四（一九二五）年

ローマ婚姻法の東方化（二）（二）完 『法学論叢』 一三卷二号 同二号（註：在ベルリン執筆）

ローマ親権法の東方化（二）（二）完 『法学論叢』 一三卷四号、一四卷四号（註：在ベルリン執筆）

ドイツに於ける暴利取締令の一問題 『法学論叢』 一三卷四号（註：在ベルリン執筆）

大正二五、昭和元（一九二六）年

ドイツに於ける地上権法の改正 『法学論叢』 一五卷二号

ローマの内縁と日本のそれ（二）（二）完 『法学叢林』 二八卷九、一〇号（①）

〔関連〕船田亨二『栗生法学士稿』『ローマの内縁と日本のそれ』を機縁として（二）（二）（三）完 『日本法政新誌』（註：『法

律学研究』の前身）二四卷一、三、四号（昭和二年）

医師国営の第一歩〈随筆等〉 『法律春秋』 一卷四号（⑦—一二）

昭和 二（一九二七）年

婚姻法の発展（二）（二）（三）完 『法学新報』 三七卷三、四、六号（①）

いい法律家〈随筆等〉

『法律春秋』二卷二号(7)―(11)

婚姻の方式―七七五条の法史的研究

『法学論叢』一七卷五号(1)

〔書評〕(時評) (文献紹介) 『法学新報』三三卷八号

婚姻同意に関する法制の発展

『法学論叢』一七卷八号(1)

婚姻法に於ける表示主義及び目的主義(一)(二) 完

『法学論叢』一八卷三、四号

金銭債権者の優位〈随筆等〉

『法律春秋』二卷七号(7)―(8)

夫婦財産契約の活用

『法学志林』二九卷九号(1)

夫の貞操義務の條文上の根據

『法学志林』二九卷二〇号(1)

〔書評〕(時評) (文献紹介) 『法学新報』三七卷二号

相姦婚姻の禁を撤せよ〈随筆等〉

『法律春秋』二卷二二号(7)―(19)

昭和 三(一九二八)年

ビザンチン研究の過去及現在

『法学論叢』一九卷四号

死亡宣告制度の成立するまで

『法学論叢』二〇卷二号(8)

遺族損害賠償請求権分解の傾向

『法学論叢』二〇卷八号

昭和 四(一九二九)年

肖像権Ⅱ人格権の社会化〈随筆等〉

『法律春秋』四卷一号(7)―(11)

昭和 五(一九三〇)年

意思欠缺の抗弁の制度—意思表示法の発達史— 『法学論叢』 二三卷二号(⑧)〈註:⑧収録に当たり、副題を表題に変更。〉

イエーリング〈辞典項目〉 『社会科学大辞典』(社会思想社編 改造社刊、五月二五日)

法規史の觀念 『京都帝国大学新聞』 一三〇号(二〇月五日号) (『京都大学新聞縮刷版』〈京都大学新聞社 昭和四四年。後、増補

の上、不二出版より昭和六一年七月一〇日に『復刻版京都大学新聞』として刊行。第一卷〈大正二四年四月〜昭和九年三月〉六〇二

頁、昭和四四年) ⑦—六〈註:一部収録。〉

昭和 六(一九三二)年

離婚原因の拡大史 『春木(二郎)先生還暦祝賀論文集』(有斐閣、昭和六年一月一〇日刊) 所収(⑧)

〔書評〕廣濱嘉雄『春木先生還暦祝賀論文集』中の栗生先生の部分 『法律時報』三卷四号(昭和六年)

中川(善之助)教授の批評(註:栗生著⑤A『婚姻法の近代化』)に対して 『法律時報』三卷二号(⑦—二一)〈註:一部収録。〉

昭和 七(一九三二)年

経済上の自由放任と契約の自由 『法学』一卷二号(⑧)

教会法の法源(一)(二)完 『法学論叢』二七卷五、六号(⑧)

法の目的・法の変革 『法学』一卷七号

〔書評〕(所説要領の紹介)『司法協会雑誌』(註:京城)一二卷八号

法律解釈学の神学性はいかにして始まったか(一)(二)(三)完 『法学志林』三四卷九、一〇、一一号(⑧)

昭和 八（一九三三）年

ゲルマン古法のスケッチ（一）（二）（三）（四）完 『法学』二卷二、二、三、四号（⑧）

大学閉鎖の前提 瀧川教授の問題 〈随筆等〉 『東京朝日新聞』五月二四日（『東京朝日新聞縮刷版』五月一四日二三頁）、『大阪

朝日新聞』五月一七日（『大阪朝日新聞』については、世界思想社編『瀧川事件 記録と資料』〈世界思想社、平成二三年八月三〇日

刊〉に拠る。以下『瀧川事件』として引用。）（⑦—二三）

解釈法学の神学性 『法学』二卷八号

京大事件への批判〈随筆等〉 『中央公論』四八年七号（昭和八年七月号）（⑦—一二、一四）

論壇時評（二） 有意義な二問題—有沢（広巳）、末弘（厳太郎）両氏の論文〈書評、随筆等〉 『読売新聞』七月二七日（⑦—一

六、但し、有沢「人絹紡績企業論」『中央公論』八月号は未収録。）

論壇時評（二） 京大問題の諸論文（註：美濃部達吉、横田喜三郎）並に牧野（英一）、阿部（真之助）氏等の所説〈書評、随筆等〉 『読

売新聞』七月二八日（⑦—一六）

論壇時評（三） 地平線を抽く（ママ）恒藤（恭）氏、同窓としての人間佐野学〈書評、随筆等〉 『読売新聞』七月二九日（⑦

—一六）

論壇時評（四） 大森（義太郎）氏の自由意志論〈書評、随筆等〉 『読売新聞』七月三〇日（⑦—二〇）

伊沢孝平、栗生武夫他『法学協会五十周年記念論文集』（註：第一、二部、東京、法学協会、昭和八年四月）（公評）（東北帝国大学法文

学部） 『法律時報』五卷八号

観望する 栗生武夫氏談話（註：京大事件関係）〈談話〉

『帝国大学新聞』昭和八年九月四日（前掲『瀧川事件』七四四頁）。

モダン婚姻法〈随筆等〉

『中央公論』四八年一〇号（昭和八年一〇月号）（⑦）

昭和 九（一九三四）年

法律解釈の本質（一）（二）完

『法と経済』（註：立命館大学）二卷二、二号（⑧）

『書評』加古祐二郎「栗生武夫『法律解釈の本質』」『法律時報』六卷九号（昭和九年）

輿論を汲んで善処して貰いたい 栗生武夫教授談（註：京大事件関係）〈談話〉

『帝国大学新聞』一月二九日（前掲『瀧川事件』

七五七頁）

中世イタリイにおけるローマ法の運命―註釈学勃興前の状況―

『東北帝国大学法文学部創立十周年記念法学論集』（有斐閣、昭和

九年三月三〇日刊）所収（⑧）〈註：昭和八年十二月三〇日稿の記載あり。〉

法律学の転落

『中央公論』四九年四号（昭和九年四月号）

僕の愚知（ママ）

『大阪朝日新聞』五月二五日京都版投書欄「カクテル」（⑦）―一五―「一つの愚痴」、前掲『瀧川事件』二九四

頁。なお、「カクテル」については、『石語「カクテル」第一輯』〈政経書院、一九三五年〉なるものが出ている由である（右『瀧

川事件』二五三頁）。

註釈学者（グロサトーレン）の群像

『法学』三卷八号（⑧）

『書評』淵（測）定「栗生武夫『註釈学者の群像』」

『法律時報』六卷八号（昭和九年）

（穂積重遠）「有関法学」〈書評〉

『東京朝日新聞』六月八日（前掲『東京朝日新聞縮刷版』昭和九年六月一二頁）（⑦）―一二―

八月の論壇(二) 新人のナチス論 峰村(ママ、峯村光郎)氏の『民族と法律』〈書評、随筆等〉 『東京朝日新聞』七月二八

日(右『縮刷版』七月四〇九頁)(⑦—一八)

八月の論壇(二) 重臣會議論—美濃部(達吉)、森口(繁治)両博士の説— 〈書評、随筆等〉 『東京朝日新聞』七月二九日(右

『縮刷版』七月四二三頁)(⑦—三三、三三)

八月の論壇(三) 華々しき論戦—日本資本主義の特質問題— 〈書評、随筆等〉 『東京朝日新聞』七月三〇日(右『縮刷版』七

月四三七頁)

八月の論壇(四) 完 うはさ(ゝ)の分析(長谷川) 如是閑氏の小品論文 〈書評、随筆等〉 『東京朝日新聞』七月二日(右

『縮刷版』七月四五二頁)(⑦—一九)

ナチ法律哲学 『改造』一六卷二〇号(昭和九年九月号)(⑧)

政治の優越と司法の隷属—ナチ政權下の司法の地位— 『中央公論』四九年二二号(昭和九年一〇月号)

橋本(文雄)君の思出 〈随筆等〉 『法学』三卷二〇号(⑦—四七)註:改稿して収録。後に、『書齋の窓』四七号 〈昭和三年

七月〉に再録。

昭和二〇(一九三五)年

一 法学者の嘆息 〈随筆等〉 『中央公論』五〇年七号(昭和一〇年七月号)(⑦—二四、二五、二六、二七、二八、二九と

して収録)

【書評】磯崎辰五郎『栗生武夫』『一法学者の嘆息』『法律時報』七卷八号

女給の社会学〈随筆等〉

『文藝春秋』九月号（⑦—四八）

法律社会学の課題〈随筆等〉

『帝国大学新聞』五九七号（二月四日号）（前掲『帝国大学新聞複製版』九卷四二頁）（⑦—二

二）

現代の恋愛〈随筆等〉

『中央公論』続五〇周年記念特大号（昭和二〇年二月号）（⑦—一五〇）

論壇時評（二） 現代への四五の渦点 十二月号雑誌内容分布図〈書評、随筆等〉

『読売新聞』二月二九日（⑦—一七）

論壇時評（二） 支那問題論文への難点 現象を科学的判断で〈書評、随筆等〉

『読売新聞』二月三〇日（⑦—一七）

論壇時評（三） 封建的農村地代と解放 平野（義太郎）、向坂（逸郎）両氏の論争〈書評、随筆等〉

『読売新聞』二月二日（⑦—

一七）

論壇時評（完）（ママ） 進歩なき大学の講義 新聞の社説の変遷〈書評、随筆等〉

『読売新聞』二月三日（⑦—一七）

法の実質 『法学』四卷二二号（⑧）

昭和一一（一九三六）年

ナチス学者の指摘した近代法の精神

『法律時報』八卷一号（⑦—七）註：改稿して収録。

ドラコー法典（辞典項目）

『法律学辞典』（岩波書店）第二卷（三月一五期刊）

ハムラビー法典（辞典項目）

『法律学辞典』（岩波書店）第四卷（八月二七期刊）

マヌー法典（辞典項目）

『法律学辞典』（岩波書店）第四卷（八月二七期刊）

モーゼ・タルムッド法典（辞典項目）

『法律学辞典』（岩波書店）第四卷（八月二七期刊）

昭和一二（一九三七）年

中世都市の法 『法学』六卷二二号（⑩）

高等試験令の改正（上）自由主義下の官吏政策〈随筆等〉

『東京朝日新聞』一二月二四日（前掲『東京朝日新聞縮刷版』一二月

二二八頁）

高等試験令の改正（下）統制経済下の官吏政策〈随筆等〉

『東京朝日新聞』一二月二五日（右『縮刷版』一二月三四頁）

昭和二三（一九三八）年

カレントブックス（田村徳治『学問と世界の真実』〈立命館出版、昭和二年二月〉他）〈書評〉

『帝国大学新聞』七〇三号（二

月七日号）（前掲『帝国大学新聞複製版』一二卷二六頁）

不徹底な高文改正案〈随筆等〉

『帝国大学新聞』七〇七号（二月二四日号）（右『帝国大学新聞複製版』一二卷七一頁）

中世末葉における法的規範の発生（一）（二）完

『公法雑誌』四卷二、二号（⑩）

中世の農民（一）（二）（未完）

『法学』七卷三、四号（⑩）〈註：収録に当たり、（一）のみ「農民の発生」と改称。〉

中世の貴族 『公法雑誌』四卷七号（⑩）

震災の思出〈随筆等〉

『文藝春秋』七月号

中世の自由人 『法学』七卷九号（⑩）

牧野（英二）博士の『刑法三〇年』 『法律時報』一〇卷九号

中世の慣習法理論

『佐々木（惣二）博士還暦記念 国家及法律の理論』（有斐閣、昭和十三年一〇月二五日刊）所収（⑩）〈註：

入会の歴史(一)(二)完

『法学』九卷九号、一一号(⑪)

法律学の一転回〈随筆等〉

『帝国大学新聞』八二八号(二〇月二日号)(前掲『帝国大学新聞複製版』一四卷二七八頁)

昭和一六(一九四二)年

日本固有法論の使命〈随筆等〉

『帝国大学新聞』八四二号(二月三日号)(右『帝国大学新聞複製版』一五卷三四頁)

昭和一七(一九四二)年

(五月二日逝去)

昭和三二(一九五七)年

橋本文雄君の思い出〈随筆等〉

『書斎の窓』(有斐閣)四七号(七月号)(註：前掲『法学』三卷二〇号〈昭和九年〉所収のもの

の改題再録。橋本『社会法と市民法』〈有斐閣、昭和三年三月刊〉刊行の参考資料として掲載。)

(初出等調査中のもの)

⑦『一法学者の嘆息』(昭和二年一〇月刊)の諸随筆中初出未判明の論稿(『河北新報』は未調査。)

四 司法制度の刷新(註：昭和九年八月以降)、二三 ローマ没落の原因、三〇 政治とは何か(註：昭和七年以降)、三二 ヒットラ

ーとルーズベルト(註：昭和九年八月以降)、三四 相澤中佐の信念(註：昭和一〇年八月以降)、三五 小個人主義者としての日本

人、三六 総選挙とお祭騒ぎ、三七 英書時代、三八 モルガン、三九 アメリカからの新鮮な風、四〇 家族制度と資本主義、四一 小

作関係(註：昭和九年七月以降)、四二 農村危機(註：昭和九年七月以降)、四三 過剰人口(註：昭和九年八月以降)、四四 産兒

調節 四五 シエストフ的不安（註：昭和九年八月以降）、四六 初冬の日記、四九 情熱恋愛と趣味恋愛（註：昭和元年以降）

⑧法の理解（初出か？）

⑧ナチ政権下の法律（初出か？）

四 参考

（一） 追悼・回想

昭和一七（一九四二）年

小町谷操三『栗生教授に対する弔辞』（遺影掲載）『法学』一二卷八号（註：『本著作目録四訂稿』に収録。）

金澤理康『栗生武夫博士』『社会経済史学』一二卷四号

昭和一八（一九四三）年

高柳真三『栗生武夫』『入会の歴史其他』序言 日本評論社（九月二〇日刊）

昭和二四（一九四九）年

高柳真三『栗生武夫』『法の変動』（第二刷）跋 岩波書店

昭和二七（一九五二）年

恒藤恭「学徒生活の思い出」(上)(下)完

『同盟時報』(同盟通信社) 一二四号(七月)、一二五号(八月)

昭和二八(一九五三)年

恒藤恭「学究生活の回顧」(上)(下)完

『思想』三四三号(二月)、三四四号(二月)(註：後『現代随想全集』二七卷〈創元社、

昭和三〇年三月三〇日刊〉に再録。)

昭和三一(一九五六)年

末川博「法学におけるわが師わが友」

『法学セミナー』創刊号(註1：後末川『法律の内と外』〈有斐閣 昭和三九年八月刊〉

一八一頁、『末川博随想全集』第九卷「思い出の人と私の歩み」〈栗田出版会 昭和四七年刊〉等に再録。)(註2：末川博「学究生活

の思い出」〈『思想』三四〇号、昭和二七年一〇月〉参照。)

佐々木惣一「京のメロンと仙台の花」

『道章記』(甲鳥書林新社 六月三〇日刊)(二三二頁以下)

昭和三二(一九五八)年

小町谷操三「定年退官の辞」(註：東北大学)(昭和三年二月八日)

小町谷操三『統一船荷証券法論』(勁章書房 四月一日刊)

附録(五〇一頁)

昭和三八(一九六三)年

恒藤恭「忘れえぬ人々―その一 栗生武夫君の追憶」

『法律時報』三五卷二号

『瀧川幸辰 文と人』

瀧川幸辰先生記念会(世界思想社、二月)二〇九頁(註：後世界思想社より改編改題し瀧川春雄編『あ

る生涯瀧川幸辰 文と人』〈昭和四〇年〉として公刊。)

昭和四二（一九六七）年

西本頼「栗生博士の業績をたたえて」

『法制史研究』一六（一九六六）（三月三〇日刊）

昭和五七（一九八二）年

齋藤秀夫「栗生武夫」

『宮城県百科事典』（河北新報社、四月三日刊）

（二） 関連

明治三六（一九〇三）年

斬馬劍禪『東西兩京之大学・法科之部』

（二月刊）（註：後に『東西兩京の大学―東京帝大と京都帝大―』（講談社学術文庫、

昭和六三年二月一〇日刊）として復刻。）

大正二四（一九二五）年

『東北帝国大学一覽』（大正二四年度版）昭和一八年度版）

東北帝国大学

高窪（喜八郎）博士監修『法律年鑑』第二卷（大正二三年版）／第二五卷（昭和二四年版）

法律評論社（大正二四年）／昭和二四

年刊）

昭和 三（一九二八）年

『東大法学部の人々（下）』中「中田薫教授」

『法律春秋』二卷二〇号

昭和 八（一九三三）年

『京大法学部総崩 瀧川問題』

『東京日日新聞』五月二七日（『新聞集成昭和編年史』昭和八年度版）

昭和 一〇（一九三五）年

末弘嚴太郎責任編輯『法律年鑑』昭和一〇年版（昭和一八年版）

日本評論社（昭和一〇年（昭和一九年刊））

昭和 一一（一九三六）年

東北帝国大学庶務課編『創立二十五周年記念 東北帝国大学ノ昔ト今』

東北帝国大学

昭和 一三（一九三八）年

戒能通孝『昭和十二年法学界の回顧と展望（法制史）』

前掲末弘嚴太郎責任編輯『法律年鑑』（昭和一三年版）

林純平『関西学界展望』

文友堂書店（六月一六日刊）

昭和 一四（一九三九）年

堀米庸三『昭和十三年度に於ける我国西洋史学界の状況』

『史学雑誌』五〇編五号

昭和 一五（一九四〇）年

久保正幡他『昭和十四年の法制史学界』

『法学協会雑誌』五八卷二号

昭和 一七（一九四二）年

原田慶吉『我が国に於ける外国法史学の發達』

『東京帝国大学學術大観（法学部・経済学部）』

東京帝国大学（四月二三日刊）

『学界消息』（二九頁）金沢理康『書評・ズーム』『フランク法とローマ法』（久保（正幡）・世良（晃志郎）両氏訳）『法律時報』一四卷

六号

昭和一八（一九四三）年

『京都帝国大学史』 京都帝国大学（一二月刊）

戒能通孝『法律社会学の諸問題』（序にかへて） 日本評論社（二月刊）

『大衆人事録』第一四版 帝国秘密探偵社（註：昭和六二年に（株）日本図書センターより『昭和人名辞典』第二巻として復刊。栗生先生掲載としては最後あたりのものと思われる。）

昭和二三（一九四八）年

久保正幡『西洋法制史学界の展望』 『人文』二卷二号

三戸寿『近代法成立史序説』 国立書院

昭和二五（一九五〇）年

日本評論社出版局編『日本の法学―回顧と展望―』 日本評論社（二〇月刊）

久保正幡他『法学研究の栞』上 東京大学学生文化指導会

猪熊兼繁『法史学の建設』（五七頁） 『法律文化』四卷二号

昭和二七（一九五二）年

『京都大学学位録』（大正二〇年～昭和二六年）（二頁） 京都大学

昭和二八（一九五三）年

『東北大学法文学部略史』（二〇、三五、九二頁）

東北大学法文学部略史編纂委員会

昭和二九（一九五四）年

恒藤恭監修『法・法学年表（日本）』（『法律学体系』第二部・法学理論篇二六）

日本評論新社（七月刊）

昭和三二（一九五七）年

吾妻京一郎『東北大学法学部——法学部めぐり・6』

『法学セミナー』一月号（註：吾妻は清水英夫氏の筆名〈『法セ』五〇〇

号参照〉。後『法学部物語』へ一粒社、昭和三年七月一日刊に収録の由〈未見〉。昭和三年一・二号までは青地晨氏が執筆。）

昭和三五（一九六〇）年

『東北大学五十年史』（上、下） 東北大学（二月刊）

『田村徳治』 田村会編（昭和三五年刊）（註：未見）

昭和三六（一九六二）年

中川善之助『北向きの部屋——学生とともに四十年』（三八頁）

日本評論新社

昭和三七（一九六二）年

『日本学士院八十年史』（本編、資料編二） 日本学士院（三月刊）

『廣瀨（嘉雄）先生追悼記念論集 法と法学教育』（五七〇頁）

勁草書房（八月二日刊）

昭和三八（一九六三）年

恒藤恭「忘れえぬ人々——その二 橋本文雄君の追憶——」

『法律時報』三五卷二号

恒藤恭「忘れえぬ人々―その五 淵定君の追憶」

『法律時報』三五卷五号

昭和四〇（一九六五）年

野村平爾「戦前の民主主義法学・覚え書」（五五頁）

『法律時報』三七卷五号

昭和四一（一九六六）年

伊達秋雄「法律家の哀歎」

岩波講座『現代法6―現代の法律家―』月報（註：後に、伊達秋雄『法律家の哀歎』〈有斐閣〉〈但し自

己出版〉、昭和六一年刊）三四～三九頁に収録。）

昭和四二（一九六七）年

我妻栄、末川博、瀧川幸辰『法律学と私』（二五五頁）

日本評論社（五月刊）

『京都大学七十年史』

京都大学（二月刊）

『ジュリスト年鑑（一九六七）』中の「法学博士一覽表」（五七〇頁）

昭和四三（一九六八）年

中川善之助、清水英夫編『読書案内 法学』（二七二頁）

現代教養文庫（社会思想社、三月三〇日刊）

昭和四五（一九七〇）年

宇野弘蔵『資本論五十年』（上）

法政大学出版局（二月二六日刊）（註：栗生先生との交友関係が詳しい。二四九、二五〇、四八

二、四八三、四八五、四九三、五三三、五四四頁。）

昭和四七（一九七二）年

佐藤篤士「ヨーロッパ法史」(杉山晴康 佐藤篤士『法史学』二六二頁) 評論社

昭和四八(一九七三)年

『金沢法学』一八卷一、二合併号(三戸寿博士追悼論文集)(註:平成二一(一九九九)年夏、三戸博士御令室綾子様より、栗生先生と三戸博士との御関係について、書簡にて御教示を賜る機会に恵まれた。)

田中周友「故三戸寿教授」『法制史研究』二三号(一九七三)(三月三〇日刊)

昭和五一(一九七六)年

『中川善之助 人と学問』『法学セミナー』昭和五一年四月臨時増刊

昭和五四(一九七九)年

『追想の青山道夫―民主主義と家族法』(二六五頁) 法律文化社(二月刊)

昭和五六(一九八一)年

熊谷開作他編『日本法史年表』 日本評論社(三月刊)

昭和五九(一九八四)年

上山安敏「西本頼先生を悼む」『法制史研究』三三三号(一九八三)(三月三〇日刊)

社会経済史学会編『社会経済史学会五十年の歩み 五十年史と回顧・総目次』 社会経済史学会

潮木守一『京都帝国大学の挑戦―帝国大学史のひとつこま―』 名古屋大学出版会(註:後、増補の上、『京都帝国大学の挑戦』

〈講談社学術文庫 平成九年九月一〇日刊〉として復刻。)

昭和六二（一九八七）年

岩野英夫「わが国における法史学の歩み（一八七三―一九四五）―法制史関連科目担任者の変遷―」

『同志社法学』三九卷二・

二号（七月）

平成 八（一九九六）年

上山安敏『栗生武夫先生・船田享三博士・小早川欣吾先生著作等目録稿（三訂版）』序文 自己出版（二月二日刊）（後『栗生武夫先生略年譜・著作目録（四訂稿）』〈自己出版、平成二〇年二月二五日刊〉に再録。）

『栗生武夫先生隨筆拾遺―栗生武夫先生單行本未収録論稿集第一輯―』（八月二日、『小早川欣吾先生東洋法制史論集』〈平成八年六月二五日刊〉編纂の試作として編集するも未刊。）

平成 九（一九九七）年

柴田光蔵「田中周友先生を偲ぶ」

『有信公誌』（註：京都大学法学部同窓会誌）三九号（三月二〇日）

『京都大学百年史 部局史編一』

（財）京都大学後援会（九月二〇日刊、三二一、三二二頁）

平成二〇（一九九八）年

岩野英夫「栗生武夫の法律観について―明治末から大正末までの時代を中心にして―」

『同志社法学』四九卷五号（二五七号、

三月二〇日）

上山安敏「田中周友先生を偲ぶ」

『法制史研究』四七号（一九九七）（三月二〇日刊）

久保正幡『久保正幡略年譜・主要著作目録』

洋販（製作）（二〇月二〇日刊）

平成二一（一九九九）年

岩野英夫「栗生武夫の『法制史観』について——大正の初めから昭和五年頃までの時代を中心にして——」

『阪大法学』四九卷二・

四号（通巻二〇一・二〇二号、一月三〇日）

平成二二（二〇〇〇）年

岩野英夫「法における歴史と現代の法学教育」

『法律時報』七二巻四号（四月一日）（註：同教授は、平成二一年二月一八日関

西大学で開催された学術会議五〇周年記念シンポジウムにおいて、「法における歴史と現代の法学教育」なる表題の講演をされ、その中で、法制史教育の対象となる学者として、栗生先生と世良晃志郎教授のお二方をあげて検討された。）

平成二三（二〇〇一）年

世界思想社編集部編『瀧川事件 記録と資料』（六二・一九四、七四四、七五七頁）

世界思想社（八月三〇日刊）

岩野英夫「ワイマール期法学教育改革と法史学——栗生武夫の体験を追体験する——」

『同志社法学』五二巻六号（二七六号、三月

三二日）

平成二四（二〇〇二）年

研究代表者岩野英夫『法学教育における法史学の存在価値——わが国における法史学の成立と展開との関連で——』

平成二一年度——

平成二三年度科学研究費補助金（基盤研究〈C〉〈二〉）研究成果報告（三月刊）（註：これには、前掲岩野英夫「わが国における法

史学の歩み（一八七三—一九四五）——法制史関連科目担任者の変遷——」（註：昭和六二年刊）の修正版が収録されている。）

史学の歩み（一八七三—一九四五）——法制史関連科目担任者の変遷——」（註：昭和六二年刊）の修正版が収録されている。）

関口安義『恒藤恭とその時代』

日本エディタースクール（五月三〇日刊）（註：栗生先生については「人名索引」を参照。恒藤博

士に関しては、竹下賢、角田猛之編『恒藤恭の学問風景―その法思想の全体像―』（法律文化社、平成二一年四月一〇月刊）参照。特に一九七頁以下の文献一覧が貴重。）

平成二五（二〇〇三）年

わが国における法史学の歩み研究会（代表 岩野英夫）「聞き書き・わが国における法史学の歩み（二）―井ヶ田良治先生にお聞きする―」『同志社法学』五五巻二号（二九二号、五月三二日）（三六三頁に、追記③として工藤祐重教授の栗生先生関係の話を載せる。この部分は、上記平成一四年の岩野英夫報告書二五、二六頁にも記載する。）

（三） 栗生武右衛門氏（二八五二―一九三六）関連

- ① 『名士名家の夫人』（東京・大学館、明治三五年一月三日刊。大空社復刻『列伝叢書』一、平成五年一〇月二五日刊）
- ② 「栗生武右衛門」『大正名家録』（二六社編輯局、大正四年八月二五日刊）「クの部」二三頁
- ③ 松枝保二『数奇の人、今昔の人』（大正二三年刊、未見。）
- ④ 馬場恒吾「小泉策太郎論」『中央公論』四四巻二号（昭和四年、後、馬場恒吾『現代人物評論』〈中央公論社、昭和五年九月二五日刊〉一六四―一八九頁に再録。）
- ⑤ 『最新業界人事盛衰録』（商工事情調査会出版部、昭和六年六月二〇日刊。『昭和戦前財界人名大辞典』第二巻〈大空社、平成五年一二月一二日刊〉として復刻。）

- ⑥ 下村海南『栗生武右衛門翁』『東京朝日新聞』昭和二年二月二日（『東京朝日新聞縮刷版』昭和二年二月二八頁）
- ⑦ 『財界物故傑物伝』（実業之世界社、昭和二年刊）（註：栗生武夫先生研究にも貴重な文献である。）
- ⑧ 『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第二卷（平凡社、昭和二年七月三月初版第一刷刊、昭和五四年七月一〇日復刻版第二刷刊）
- ⑨ 栗生武夫「杉浦（重剛）先生」（『文藝春秋』昭和二年八月号）
- ⑩ 杉本寛一『京阪電気鉄道沿革誌』（昭和二年五月刊）
- ⑪ 長谷川光太郎『兜町盛衰記』第一卷、第四卷（日本証券新聞社、昭和三年刊。後に、図書出版社再刊、平成二、三年刊）
- ⑫ 大澤俊吉『大澤龍次郎翁伝』（埼玉県行田市役所、昭和三六年四月九日刊）（註：平成一〇年春下田市飯田十郎氏〈小泉三申研究家〉の御教示による。）
- ⑬ 大岡昇平『少年…ある自伝の試み』（筑摩書房、昭和五〇年刊）
- ⑭ 本宮采彦『小泉三申』（静岡・常葉学園、昭和五三年九月一日刊△二七、二八、三〇三頁△）